

「生命の教育」創始者谷口雅春先生 今月の言葉

すべては一体という愛の心をもった日本の精神性

日本人にあらわれた精神性

神話は世界各国にありますけれども、日本にあらわれた神話はやっぱり日本民族の精神を通して宇宙の真理をとらえたのでありますから、同じ真理でもとらえ方において、又その表現の仕方において、作者たる日本民族の個性なるものが現われているので、その神話を研究すると、日本民族の個性や世界観がよくわかるのであります。

(中略)

日本民族は総てバラバラに分かれているのを一つに綜

合するところの天分を持っているのでありまして、日本の

国の名前を「大和」と名づけられたということも、「や

というの「弥々」と云う字が当てはまるので、いよいよ

よ多いという意味であります。「ま」というのは「纏

める」という意味であります。弓で射る「的」を「ま」と

というの、同じことでありまして、中心に「纏まって

いる姿を現わしています。いろいろに分かれています、

その悉くが一つに纏まるべきものであって、決してバ

ラバラのものは存在しない、宇宙は一つである、世界は

一つであるということのその人生観が、古代の日本民

族を通して現在の日本民族に至るまでずっと貫き通して

いるところの民族的信念とでもいふべきものなのであります。
(新装新版『真理』第3巻239〜241頁)

「大和」の国号にあらわれた「愛」の心

日本民族は、人類互に相和そうと云う理想をもつて、国をはじめたのでありまして、「大和」の国号がそれを示しているのであります。これが日本建国の精神なのであります。「形は心をあらわす」と云う諺があります。呂敷はどんな形のもので、その形を毀さずに一緒に包んでしまうことが出来るのであります。他の国を毀して併呑するのは霸道であつて、日本の皇道ではありません。日本の精神は風呂敷精神であります。総ての物を毀すことなく一つに包んで「人類」と兄弟となり一族となるのを建国の理想としているのが日本民族であります。(中略)

「人類は互に一つだ」と云う大和の精神が、日本精神で

ありますから、日本の建国の理想は「愛」だと云うことが出来るのです。「愛」と云うのは、どの人種も、元は一つと云う自他一体の自覚であります。自分と他とは形の上では別々であつても、生命は一体だと云う自覚です。「私はあの人を愛する」と云うことは、あの人と私とは本来一つである。そこで彼の悦びを私の悦びとし、彼の悲しみを私の悲しみと感ずる、これが「愛」であります。それは、或は男女の恋愛のようにも現われ、或は父母親子の愛と云うような関係にも現われ、或は家族が一体であると云う感じの家族愛と云うものになつて現われ、或は国を愛する愛国心ともあらわれ、或は人類を愛する人類愛ともなつて、あらわれます。吾々はこれらの色々の愛を、その内の一つでなく、みなことごとく調和した相で愛し得るように努力するとき、偏つた人間ではなく「全人」としての完全な人間の魂がみがかれるのであります。

(新装新版『真理』第3巻232〜233頁)

日本の国を愛するとは

愛し得る値打のある国というものがあれば愛するけれども、愛し得る国としての資格があるかわからず、現状のような日本国では愛することができないというのは、それは国というものを、唯、単に形にあらわれている現状の国——即ち現象の国家——だけを日本国だと思つてゐるために、こんなに強盗や、強姦や、失業者や、ストライキや、戦争や、つまらないことばかり充滿してゐる此のような国家は、愛することはできないということになるのでありますけれども、その現実の奥に「理念の日本の国」なるところの、目に見えざる「国の本体」なるものをみたならば、其処に希望が生まれ、其の国に生きてゐることに、生甲斐を感じ、其の国を愛することができるのであります。外面の現象は如何にともあれ、それを内在の理念——理想に近づけて行くところに希望が持て、勇気が出、生甲斐が感じられて来るのであります。

す。

（新装新版『真理』第7巻272～273頁）

日本人が日本的であることが世界のためになる

日本に生れた日本人は日本を愛し善くすることによって世界に奉仕し、人類に貢献すべきであります。日本人が日本的であることが、世界のためになるのは、桜の木が桜の花を咲かせることによって人類を喜ばすのと同様であります。国民がその国土に生れて、その国土から恩恵を受け、自分が現在安穩に生活を続けられているのも全て国土のお蔭です。国土の恩と同時に、その国土の開発にぶさに艱苦を嘗めつつ努力して来られた祖先の賜でもあります。此の恩この賜の一切を否定してしまつて、祖国などはどうでも好い、祖先の意志などというものはどうでも好いものだというように祖国に対して反逆的思想をいだくということは、恩の否定、賜の否定、感謝の否定ということになって、これは神の道——人の道ではないのであります。（新編『生命の實相』第6巻96～97頁）